
消しゴム

saku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
消しゴム

【Nコード】
N7378P

【作者名】
saku

【あらすじ】
体育館にて、自主練中。

また、五月蠅い奴がやってきた。

（前書き）

この名義ではじめての短編小説です。

高校の授業中に考えた本当に短いお話ですが、読んでみていただければ嬉しいです。

「何、やってんだ…？」

早朝、体育館でバレーの練習をしていた私に、潤が話しかけてきた。

「見りや分かるでしょ？自主練。」

「…ふん。うちのバレー部なんてそんな必死になるほど、強くないだろ？」

…無神経。いつもそう。少なくともバレー部員に言う言葉じゃないだろう…。

「五月蠅い。」

昨日の事があったから余計潤と話なんてしなくなかった。

「そう言やあさあ…。2組の加藤潤が、お前の事好きなんだってえ…。」

クラスの男子にそう言われた。

「放課後に、ウサギの餌やりあるから、裏の小屋の前で待っててよ。」

同じクラスの親友にそう言われて、確認もしないまま行ったら…はめられた。

…ウサギ小屋の前には私と潤の2人だけ。

別に好きでもない男子と2人きりとか、やることが粗すぎる。

「ねえねえ、キスしていい？」

…絶句。何コイツ！？静かな奴だと思ってたら、こんな奴だったのかよ…！？

「は！？」

「いいじゃん。ほつぺに。初デート記念。」

…いや、デートじゃないし。…てか、やめろ…。

「…やめてよ！」

そのとき、頬にひんやりした物が当たった。…まさか。

「これ。」

潤が差し出したのは白い消しゴム。

「びつくりした？」

立ちすくむ私を尻目に潤は帰っていった。

…。

「どうしたんだ？」

私は潤に言われて、はっと我に返った。

そうだ、自主練してたんだっけ？すっかりボーっとしていた。

「べ、別に…。」

「そうか。…おっと、そうこうしてる内に、俺達も朝練の時間だ。」

去っていく潤に、私は言った。

「サッカー部だって、そんな本気になるほど、強くないでしょ？」

「うるせえよ。」

遠くで…聞こえた。

なんか、私、コイツのこと、好きかも知れない。

… F i n …

（後書き）

ありがとうございました。

「犯罪島」のほうも、更新していけたらと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7378p/>

消しゴム

2010年12月31日05時42分発行